

優しい密室 栗本 薫

栗本 薫 しい密室



講談社

優しい密室

定価 八九〇円

第1刷発行 昭和56年1月31日

著者 栗本 薫

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社



〒112 東京都文京区音羽2-12-21

電話 東京(03)945-1111(大代表)

振替 東京8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社黒岩大光堂

落丁本・乱丁本はお取り替えます。

© KAORU KURIMOTO 1981 Printed in Japan

優しい密室 目次

プロローグ	5
一時間目	7
二時間目	35
三時間目	64
四時間目	93
昼休み	123
五時間目	154
六時間目	185
放課後——大団円	226

装帧 福田隆義

優しい密室

プロローグ

十七歳のとき、私は「みにくいアヒルの子」だった。

私はなんにも知らなかった。自分が何を求めているのか、何をしたいのか、何をいちばん、どう感じているのか、それさえも――

私が十七歳のときにも、早熟な女の子はいたし、ね、ねもいた。私はそうしたクラスメートにこまれて、しかしそのどちらでも――ませて口紅をこっそりつけて夜の町をうろついたり、まだ父親と一緒に風呂に入っていたり――そのどちらでもなかった。私の魂は、まだ眠っていた。しかし、自分のすべて――容貌、才能、成績、人に好感をもたれるかどうか、人望、自分の性格のよさ、さきの見とおし――そのすべてに自信をもっていなかった私は、すでに漠然とした悲哀とやるせない困惑を知っているという点で、世の中が思いどおりにゆかぬものだと思われた娘になっていたのである。

高校時代の私は、陰気で目立たない、というより目立たないようにつとめようとしている、沈ん

だやせっぽちの小娘だった。そのころの私をしか知らない友達は、いま街で、華やかな色あいを身につけた私にぶつかると、「まあ——あなた、カオルさん？　ほんとにカオルさん？」と絶句する。

私を変えてくれ、卵の殻の中からひっぱり出し、むりやりに、私の中にかくれていた本当の私——激しく、自分を信じ、大胆で、なみはずれて好奇心にみちた女性をひきずり出してくれたのは、ある青年との出会い——偶然の、そして運命的な出会いによるものだった。その青年を私が恋したというのではないが、それよりもっと親密な、あたたかく力づよい感情の交流でもって、彼は私を変え、そしてはげましつづけて、いまあるような、若い女流作家への道へと押し出してくれたのである。

私は「みにくいアヒルの子」だった。そして、これは、私が最初に彼と共にした冒険の一ページめ——私が十七で、彼が二十四の年の物語なのである。

一時間目

Ⅰ

「ねえ……」

トウ子が私の耳に口をよせてきて、ひそひそと云ったとき、私は、その内容をとくに予測がっていた。

「知ってる——今度の教生、男よ……」

「いいんじゃない」

私は素気なく答えた。トウ子は私の親友、ということになっているが、その関係はおそらく、世の中の亭主と女房の関係の方にもっと似ているだろう。トウ子は小柄で、色が黒く、よくしゃべり、誰とでもうまが合う。そして、彼女は、たわいのないお喋りを朝から晩まで私に注ぎかけては、私が「時流」から遅れたり、ニュースにうとくなったりすることのないよう、気を配っているつもりでいる。こんな古ぼけた女子高校の中にさえ、それなりの社交界とか、世間とかいうものは、必ずできあがってしまうものなのだ。

「カオルったら、冷たいのねえ」

トウ子は私の反応に失望したような声を出した。

「ビッグニュースじゃんよ」

「どうせ、一カ月っかいやしないのよ」

「でもさ、男よ！——若い独身のオトコ！　ハンサムかしらん。好みのタイプなら、アタックしちゃお……」

「およしよ。東さんたちみたいなこと云うのは」

私はむつつりと云った。それより、いま書きかけの小説の第二章を、この昼休み中に仕上げてしまいたいのだ。私が小説を書きためていることは、トウ子にもうちあけてない。トウ子は、私のやっているのは文芸部の課題だ、と信じている。

「あらあ、でもあの子たちはみんなBFがあるんだから——カオルだって、手近に男があらわれたときぐらい、がんばらないと……十七にもなって、BFのひとりもないってんじや淋しいわよ——BFどころかさ……」

トウ子は、教室の反対側の一角に、我物顔にのさばっている一群を、ねたましいような、さげすむような目つきでそっと見やった。

「ねえ、カオル——東さんと原さんで、どっちかはもう……って話よ。同じ男をとりっこして、勝った方がいただいちゃったんだって……どっちが勝ったのか、佐久間も村田も絶対云わないのよ……」

私は、少しうんざりしながら、付合いのようにそっちへ目をやった。

東美香と原千里——どんなクラスにも、必ず一人かふたり、「女王さま」役をする女の子が出て

くるものだ。この二人では、真の女王の品格がない。たとえばとなりのC組の、生徒会長の高村竜子のような——しかし、少なくとも、かれら二人が自らB組の女王をもって任じていることはたしかだった。

たしかに、二人とも、美人だ。それに目立つ——十七という、少女のいちばん美しい年頃と思われがちな、しかし実は、女の子がごくわずかな例外をのぞいて、いちばん顔もからだつきも決まっておらず、精神的にも不安定で、女にはほど遠い、しかしもう少女の清らかな美は失っている、というぶざまな時期には、その二つだけでもう立派に他の少女を威圧する武器となる。

少女マンガによくあるように、父親がPTAの会長だの、有力者だの、ということではなかった。あるのかもしれないが、女子校のなかなどというものはそれなりに実力主義の世界なのである。PTA会長の娘はむしろ青白くて少しも目立たぬ病気がちの子だった。

原千里は弁護士志望だという。チャイニーズふうの、きついフリあがった目と、てきばきした物云いでもって、先生たちにも何となく一目おかれている——東美香は非常な美人だ。色があざ黒く、ちょっとフィリピン系の感じで、そして素行がわるいらしい。もっともそれは、非行などいってまたかの知れている、われわれ「いい子」の生徒がひそかに憧れて云うような種類のものだろう。どちらも、気がつく、そして原千里は馬づらで手足をもてあましているような佐久間由美を、東美香はやせっぽちでけたたましい村田洋子を、それぞれ側近に従え、その他に何人かずつ、いわゆるお取り巻きをもっていた。

彼女たちが、ことあるごとに、張合ってみせたり、すでに男を知っていると、何人BFがいる、というそぶりをひけらかすのは、私にはいくぶんわざとらしく見えた。本当の不良は、むしろ

そんなところは見せたがらぬだろう、というのが私の持論で、この二人はいい子ばかりのこの私立の女子高校で、自分の役割を心得顔に演技しているだけの、じっさいにはまったくいい子の部類とふんでいる。しかし、トウ子は、正直で、原千里が大学生と付合っている、すごい、とか、東美香が夜の公園でB、つまりベッティングをしているところを人に見られ先生に呼びつけられた、不良、などというニュースを、飽きもせずせつせと私にもたらしに来るのだった。

「勝手にやらせとけばいいのよ、あの子たちには」

私は、ちょうど弁当をたべおえていたので、アルミの弁当箱をしまいこみ、椅子をひいて立ちあがった。窓ぎわの席で、東美香と、彼女のお取り巻き連中が、何かいやらしいことをささやきかわしては、わあっと笑い出すのがかましい。クラスの半分ぐらいいは、食事をおえるのもどかしく、バレーボールやバドミントンをやりに校庭へとび出していった。

「図書室へいってくる」

これ以上、トウ子の話につきあわさせられては、かなわない、と私は思った。

不服そうな、まだ話したげなトウ子をおいて、ノートをまとめると私は高二Bの教室を出た。

廊下は、紺サージのスカートのひだをひるがえしてばたばたとかけまわる、まっくろけの女の子たちで一杯だ。女子高校生なんて、決してセーラー服幻想なんかおこさせる代物じゃない。彼女たちは、粗野で、埃くさく、サージのスカートをかてか光らせ、そしてありったけの声で怒鳴りあう、汗くさいにきびだらけの——つまりは同じ年ごろの男子高校生と少しもかわるところのない生物なのだ。

だが、この年で、そんなふうに考えたり、東美香や原千里を見すかしたような、変に老成した態

度をとりにたがる私の方こそ、もしかしたらよほど可愛げのない、イヤな女の子なのかもしれない。このころの私のなかには、しょっちゅうそんなふうに分裂していた。

五月の末のひるさがりの校舎のなかには、うわーんと蜂の巣箱のようなさわがしさと共に、妙にひんやりとした静けさが同居している。廊下をぬけ、階段を上り、図書室に入ってゆくと、大好きな、古い本のかびくさい安らぎにみちた匂いと共に、そのひんやりとした静けさだけが私を包みこんだ。

二階の図書室は、私が学校の中でいちばん好きな——同時に、学校の中でただ一箇所、私がほんとうに心からおちつける隠れ家だった。私は顔見知りの司書のお姉さんに、かりていた本を返し、次の本を物色するために、奥の棚へいった。

そして、ちょっとぎくりとして立ちどまった。

奥の棚は、「哲学、宗教学」で、ほとんど利用者のいないところである。そこでじっくりと本をえらび、眺めるのは、私の楽しみだった。それは、私の「人の目にふれたくない」極端な人見知りの気質にかなうと同時に、この学校で、こんな難しい本をよんでいるのは私しかないのだ、という、私の幼稚な虚栄心をも満足させた。

その、「哲学、宗教学」の棚の前に、人が立っている。

図書室である以上、別に私以外にもそんなものに興味を示す人間がいたってふしぎはない。現に、それぞれの本のうしろにとりつけてある貸出カードにはまれに、先にその本を読んだ人の名がしるされてあることがあって、私にこの眠っているような学校でこうした本を読んでいた少女への興味をかきたてた。

しかし、そのとき私がおどろいたのは、まったくこの明治以来の、女の園ともいうべき場所ならではの理由——すなわち、そこに立って、しかつめらしい顔をして、ぶあつい哲学の本をのぞきこんでいたのは、なんと、まったく見覚えのない若い男だったからである。

反射的に、私は逃げ出そうとしかけた。しかし、好奇心が、私の動きをのろくしていた。誰だろう？　たいていが中年以上の、先生たちの誰か、あるいは事務の職員の誰かでもない。

その男は背が高かった。すごくやせて、白いシャツと汚きたえないズボンを身につけ、髪はいくぶん長い。色白で、銀ぶちめがねをかけた横顔はずいぶん長く、そしておとなしそうだ。

（こんどの教生、男ですってよ）

私たちの学校は中学から大学までエスカレーター式の、良妻賢母学校で売っている。だからこそ受験に目の色をかえるべき高二の五月になっても、私たちは、世の大きなざわぎなどどこ吹く風と、好き勝手なことをしていられるのだ。

それで、たいてい、毎年このじぶんになるとやってくる教育実習生——教生も、その十人中九人までは、上の大学の先輩で、かつては自分たちもこの高校の生徒だった娘ばかりである。たしかに、「男の教生」はトウ子のいうとおり大事件だった。

（たいしてハンサムじゃない）

冷酷な評価を下しおえると、私はとりあえず好奇心をみたして、そそくさと退散しようとした。が、私は、少し長いこと、興味をあらさまに立ちつくしすぎていたらしい。

その青年——教生——は、まともにこっちへ顔をむけた。

いまのこの進んだ世の中で、と笑われるかもしれないが、私は、十七のそれまで、家族でも親戚

でも先生でもない、しかも若い男と、個人的に口をきいたことは、ほとんどなかったのである。

私はまっかになった。たちまち逃げ出さなかったのは、こうなってからそうしては、あまりにもていさいがわるい——いかにも私が男と口をきいたこともないみたいで——という、情けない理由にすぎなかった。

青年は、まじまじと私を見つめていた。正面からみると、ずいぶんとつばい顔だった。いかにも白哲の秀才然として、前髪なんか垂らしているくせに、どことなくひょうきんな、とぼけた感じを与えるのである。どこからどこまでほっそりとして、ほとんど弱々しいと云いたいくらいだ。顎も首も胴体も足もみんな長い。銀ぶちめがねの奥で、くると丸い目がじっと私をみているようすは、妙に、とんぼを思わせた。

しかし、もちろん、とっさに私がそんなことを考えついたわけではない。それはあとからの印象である。そのときは、私はうろたえ、とりのぼせて、足がすくんだようにあいてを見つめかえしていただけた。

私のようすは、さぞ、怯^{おそ}えたウサギのようにこっけいだったのにちがいない。とりのぼせた頭の芯でちらっと、東美香が原千里だったら、こんなときどんなふうにふるまうかは、よくわきまえているのだろうにと、口惜しさに似たものがうずいた。

と見てとったのだろうか。すると青年は、にこりと笑ったのである。

笑いは、おどろくほど、彼のとぼけた印象をかえた。何か、胸にしみ入るようなやさしさ、ほのぼのとしたぬくもりのようなものが、彼のはにかんだ笑顔から、太陽のように放射されてき、私はいっそうどぎまぎした。

「あの……」

彼は、いくぶんおどしたようすで云った。

「この本——要るのかしら？」

彼の声は、気持のよいテノールだった。彼は私が彼の手にしている本がほしくて、それで彼をにらみつけているのかと考えたらしい。彼はそれを私の方にさし出してみせた。キルケゴールの「死に至る病」だった。私は少し心がなごんだ。それは、すでに、読みおえた本だったからだ。

「いえ——いいんです」

すらすらと声が出たのが嬉しかった。

「もうそれ、読みましたから」

あいてがめがねの奥で、丸い目をいっそう丸くするのをみて、私はちょっと気持がよかった。

「じゃ——」

しかし次のことばに私はぎょっとした。

「森カオル君でしょう」

「え？」

私の声はけわしくなっていたにちがいない。

「なぜ、知ってるんですか」

「あ。このカードに、名前が書いてあったから。いまちょっと、考えてたんです。ここは、受験校でもないし、ごく良妻賢母的な女性を理想として教育している、ってさっき、教頭先生にきかされたから。その女学校で、こういう本を高一で読んでもる人は、どんな人だろうと思って」